



Title	＜書評＞宮本みち子・佐藤洋作・宮本太郎 編書『アンダークラス化する若者たちー生活保障をどう立て直すかー』明石書店、2021年、320頁、定価2530円
Author(s)	水野, 聖良
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 310-313
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88559
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宮本みち子・佐藤洋作・宮本太郎 編書

『アンダークラス化する若者たち——生活保障をどう立て直すか——』

明石書店、2021年、320頁、定価2530円

水野 聖良

若者問題と聞くと、ニートやフリーターの増加を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。そして、それは、若者の意欲の減少や無力感によるものだと言われ、義務教育段階においてキャリア教育が推進されるようになって久しい。しかしながら、根本的な原因はもっと違うところにあるのではないか。本書を記した15名の著者たちは、社会のメカニズムとの関連から若者問題を俯瞰した。そして、将来社会の担い手となっていく若者世代を支え、社会を維持するために必要な支援を、2020年から蔓延した新型コロナウイルスによる若者たちの影響にも触れながら論じ挙げた(主に、「おわりに」にて)。

本書は、「アンダークラス」(不安定な雇用、際立つ低賃金、結婚・家族形成の困難という特徴を持つ一群であり、従来の労働者階級とも異質なひとつ下層階級を構成する社会階層)に陥りつつある若者たちにフォーカスを当てた。そして、彼らの実態を明らかにするとともに、その背景にある日本特有の社会システムを暴き出すことで、現代社会において必要な若者支援を提示することを目的とした。

本書の最大の特徴は、若者問題に関して、ミクロな観点(若者の現状・地域での取り組み)からマクロな観点(法・国家・

行政の対応)まで幅広く論じられていることである。本書は11章で構成されているが、大きく3つのテーマに分けられると評者は考える。

第1部(第1章・第2章・第3章)では、「若者問題とは何か」という問いのもと、若者がアンダークラスに陥っている現状や原因、その見えづらさの理由が分析され、若者の生活保障を確立するための課題が提示されていた。第1章では、諸外国と比較しながら貧困の見えづらさの原因を分析することで、日本特有の親子関係を課題として指摘している。日本の社会制度には若者の生活保障の責任は親が持つという前提があるために親に頼ることができない若者への国家のサポート体制が整っていない。そして制度の網からこぼれ落ちた若者がアンダークラスに陥っていることが明らかにされた。第2章では高校に焦点を当て、定時制高校や通信制高校、普通科高校の底辺校に「障がい特性」や「貧困」「低学力」の生徒たちが集中するようになり、公教育が上手く機能していない現状を指摘する。そして高校教育が格差の再生産機能を担っている状況に著者は警鐘を鳴らす。問題解決には行政や学校だけでなく地域社会全体で支援する「コミュニティ・オーガナイズ

ング」のアプローチが必要であると著者は論じる。その上で第3章では、イギリス・オーストラリア・デンマークの若者支援システムの先行事例を取り上げること、日本の社会制度はとりわけリスクを抱えている若者の社会への移行システムが弱いことを示し、キャリア形成のためには伴走型の支援が求められる事を明らかにした。そして、社会の中の一人として自己を認識し、不利な状況を乗り越え、社会・経済的自立を目指す力を育てる「権利としてのキャリア教育」の積極的な提供の推進が主張された。

続く第2部（第4章・第5章・第6章・第7章）では、具体的な実践例を交えながら、地域社会におけるアンダークラス化する若者の支援について論じられた。第2部は具体的な事例も多いため、それぞれ興味のある章から手軽に読むことができる。第4章では就労支援の現状と課題が整理され、キャリアを見通すサポートを行う「求職準備者支援」を行う必要性が論じられた。そして、第6章では「社会的連帯経済」という概念を使いながら、アンダークラス化する若者が安心して社会に出るには、地域社会の中で、新しい経済システムを創り出し出口を用意する必要があると述べられていた。これらを補完する形で、相互扶助の地域づ

くりの中で、支援―被支援関係を乗り越え、交換ではなく互酬の社会作りを目指した地域の編み直しを行いながら、地域全体で就労支援を実施している「静岡方式」（第5章）、住まいを含めた居場所と緩やかな就業経験を提供するソーシャルファームを運営し、若者の自分に合った仕事探しを支援する「K2 インターナショナルグループ」（第7章）の取り組みが職員や若者の声とともに先行事例として紹介された。

そして、第3部（第8章・第9章・第10章・第11章）では、若者支援に関する社会保障・政策や法制度の課題点を示した。その上で旧来の社会的投資施策を補完する方向として、「地域密着型の社会的投資」という理念を打ち出した。初めに第8章で、日本の社会保障が家族扶養や正規雇用に基づいた保護システムに依拠しており、セーフティーネットとしては不十分であること、若者個人が現金給付の対象となるような包括的な社会保障制度の必要性が述べられていた。また、第9章で若者政策において、現在においても労働する＝自立するという見方が強く、「働ける若者」と「働けない若者」を分けて扱う傾向が強いこと、第10章では若者支援の法制度が自治体法政策との間でミスマッチを生じさせていること

を課題として掲げ、若者への投資を「社会的な見返り」につなげていくこと、多機関連携や横のつながりの必要性が論じられた。以上のことから、第11章で、かつては上手く機能していた「古い」縦割りの雇用と社会保障の仕組みが、多くの若者たちを排除している現状を示し、この状況を変えるためには、地域密着型の社会的投資を若者支援に組み入れ、若者にベーシックアセットを提供することの重要性を述べ、本書は締めくくられた。

本書は若者問題の現状・それを取り巻く社会の課題・未来への展望というストーリーに沿わせながら、若者問題に真っ向から向き合った点において大変貴重な1冊であるが、一方で、もう少し掘り下げた議論を期待したかった点を最後に指摘しておきたい。

1点目は、アンダークラスに陥る可能性のある若者の現状把握の際に、定時制高校の生徒のみにヒヤリングをしている点である。高校生のリアルな声が反映されていることは非常に評価できる点であるが、困難を抱える生徒が多く在籍する普通科高校における調査では教員にのみヒヤリングを行っており、定時制高校の例と並べて論じることができるのか疑問に残った。また近年では、公立学校の間でも格差が生まれていることから、

底辺校に限らず、見えにくい形でアンダークラスに陥っている高校生は多い(志水2021)。

2点目は、「静岡方式」(第5章)、「K2インターナショナル」(第7章)など、地域に根差した実践的な取り組みの紹介内容についてである。非常に示唆に富むものであったが、財源に関する事柄や取り組みの中で生じた課題点に関する記述がなく、他の地域でも同様の実践を行うことができるのか、どのような事柄やサポートが運営する上でより必要とされているのか、より詳細な説明が必要であると考ええる。

本書を読むことで若者問題を多様な視点から捉え、我々が各々の立場からすべきサポートについての示唆が凝集された1冊であると言える。コロナ禍で若者の貧困問題が浮き彫りになっているが、今日まで時間をかけて社会から排除され、アンダークラスに陥っている若者に目を向けることは、未来の社会を支える上で急務である。若者問題に疑問を感じている、又は学び始めた研究者、関わっている実践者、その他関心のある全ての人に本書を推薦したい。

参考文献

志水宏吉

2021 『二極化する学校—公立校の「格差」
に向き合う—』 亜紀書房。